

未来を描く
伝統産業

未来には ためく 伝統産業 フラフ



さまざまな色がそろそろ染料



大空に舞うフラフ

フラフ

「元気に育て」の思い 鮮やかに舞う



5 月を迎えると、鯉のぼりと共に端午の節句を祝うフラフが空を舞います。男の子の成長を願い祖父母や親から贈られるもので、高知県中東部の家庭では一般的です。その起源は明治初期で、語源は諸説ありますが、英語の「フラッグ(旗)」が土佐流になまって「フラフ」と呼ばれるようになったといわれています。染め物に適した自然の流水物部の存在、大きくはばたく豪快さが高知県民の人柄に

合ったことなどから土佐山田町の伝統産業

として築かれてきました。一枚一枚手作業で絵を描くフラフは、染付の最盛期ともなると早朝から深夜まで作業が及ぶこともありま。近年ではフラフの技術を活用し、のれんやタペストリーなど現代の住宅事情にあった作品が作られている他、香美市合併10周年記念のフラフ作成や、地域の子どもクラブが手染めによる旗を作るなど、フラフの伝統を次の世代へ伝えるための取組も行われています。フラフには、いつの時代も多くの家庭の喜びと願いが込められています。



時代で変わるフラフの絵柄

伝統産業であるフラフにも時代による変化があります。金太郎や七福神などの伝統的な絵柄の他、親の職業や趣味を反映した絵柄も人気です。



色止め

乾燥させながら色を止めます。この後、水洗いと縫製をして完成です。



背景染め

布を湿らせて、同じ系統の色でグラデーションをつけていきます。



さし染め

発色を良くするために水引きをしてから、はけで染めていきます。



のりづけ

もち米汁で作ったのりで、下絵を写しとるようにして描きます。

作業工程



子どもたちに受け継がれる染色文化



染色技術や絵柄を活かした製品も



水洗いでのりを落とせば、色の境目に白が浮き出る



未来を描く
伝統産業

龍馬も愛した 土佐打刃物

当時と同じ工程で
一本一本手作りを続ける

江

戸時代初期から伝わる高知県を代表する伝統工芸で、ふるさと納税の返礼品としても人気の土佐打刃物。かの坂本龍馬の愛刀「吉行」も土佐打刃物といわれています。戦国時代、武器刀剣の需要に伴い打刃物が広がり、林業が盛んだった高知県では、山林伐採に必要な打刃物が生産されました。土佐打刃物は、硬度の異なる素材を合わせ、熱し打ち伸ばし広げていくこと

で鍛えます。丹念な手作業による、折れず曲がらずの逸品は全国にその名をとどろかせました。現在でも、職人の手作りによる品質の良さが注目を集めています。職人の平均年齢が上がる一方、土佐刃物二世会の若手も負けていません。子ども向けナイフの商品開発や、香美市の鍛冶職人たちによる刃物ブランド「火床」の創設など、伝統製法を活かした新しい試みも進められています。

協同組合
土佐刃物
流通センター



刃物まつり



実演見学



協同組合土佐刃物流通センターには
さまざまな種類の鎌や包丁が並ぶ

土佐打刃物の主要な製品は、鎌・鉈(なた)などの農耕具でした。近年では包丁や園芸用刃物などニーズに応じて幅広く展開しています。

土佐 打刃物

くじらナイフ



日本刀の作刀技術から生まれた製造方法で、形状を自由自在に造り上げることができ、土佐の自由鍛造と呼ばれます。あらゆる大きさ、硬度の異なる素材を合わせ、丹念に打ち伸ばし鍛えていきます。

